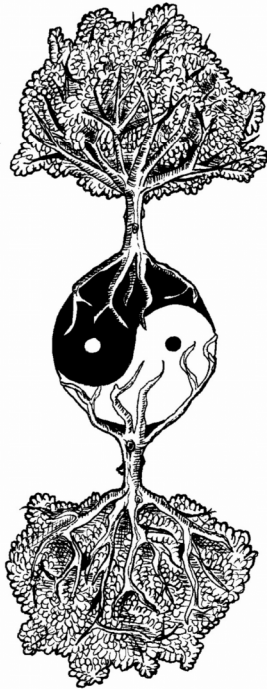


大きな樫の樹の下に

白橋
升



Tree of life



大きな櫛の樹の下に

Tree of life



白橋 升

遊星出版

表紙・挿絵
白橋
升

目次

登場人物

第一章 わが家

第二章 カタドウリ・ラジオニクス社

第三章 カタ

第四章 カタ・エレキテール社

第五章 均衡技術研究所

第六章 世界樹

第七章 天の道

第八章 天地のはざま

9

11

17

30

46

58

69

81

93



Aさんと、
マスターへ。

告、初筮。

初筮ニ、告グ。

At the first oracle I inform you.

登場人物

● ホノワール・オモタ

カタドウリ・ラジオニクス社、部品管理部部長。さえないサラリーマン。

● マリア・オモタ

ホノワール氏の妻。

● マリアール・オモタ

ホノワール氏の長女。大学四年生。

● アカツキ・オモタ

ホノワール氏の長男。短大二年生。

● リョウ・ザンガン

カタドウリ・ラジオニクス社、開発部部長。ホノワール氏の友人。

● ラム・ザガン

カタ・エレキテール社、開発部部長。やり手のサラリーマン。

● クレア・ザガン

ラム・ザガンの妻。

● ユウキ・シンダイ

カタ中央大学学長。均衡技術研究所所長。

※ 旧題「ホノワール・オモタ氏のほんとうのこと、または、でたらめのお話。」を改題した。

第一章 わが家

カタドウリと呼ばれるある国のある公園のあるベンチに、ひとりのさえない男が座っていました。

刻限はもう日の入り近くで、あたりはもう何もかも、やわらかな赤色におおわれていました。その男はホノワール・オモタ氏という会社員で、帰る途中でこの名もない公園に立ちよることが、もうずいぶん前から、数少ない楽しみのひとつになっているのでした。

といっても家に不満があるわけではありません。ただ何となく、会社から帰る時、ここに立ちよるのがならいになってしまったのです。

奥さんの名前はマリア・オモタとあって、今ではちよつとぼつちやりになってしまいました。が、笑うと赤ちゃんのような顔になるかわいいた女性でした。

マリアとの間にはふたりの子供がいました。上の女の子はホノワール氏と奥さんの名前をとってマリアールと名づけられました。マリアールはカタドウリ文化大学の四年生で文学の勉強をしていました。下は男の子でアカツキという名前。こちらはカタドウリ商科短大の二年生で会計の勉強をしていました。ふたりとも来年で卒業ですが、就職先はもう決まっています。

「ふう」

ホノワール氏は小びんの底に残ったビールを飲みほすと、ため息をつきました。この間、久

しぶりに家族が夕ご飯にそろった時のことを思い出していたのです。

ホノワール氏は奥さんがつくったスープを飲みながら、おずおずとこうきりだしました。

「おねえちゃんもアカツキも会社決まったんだったら家族でお祝いしようよ」

「チツ」

最初に舌打ちをしたのはアカツキでした。

「いいよ、そういうの。祝うほどのことじゃないし」

すかさず、マリールもいいます。

「あたし、時間ないから」

話はそこで終わりでした。

マリールも黙っていました。

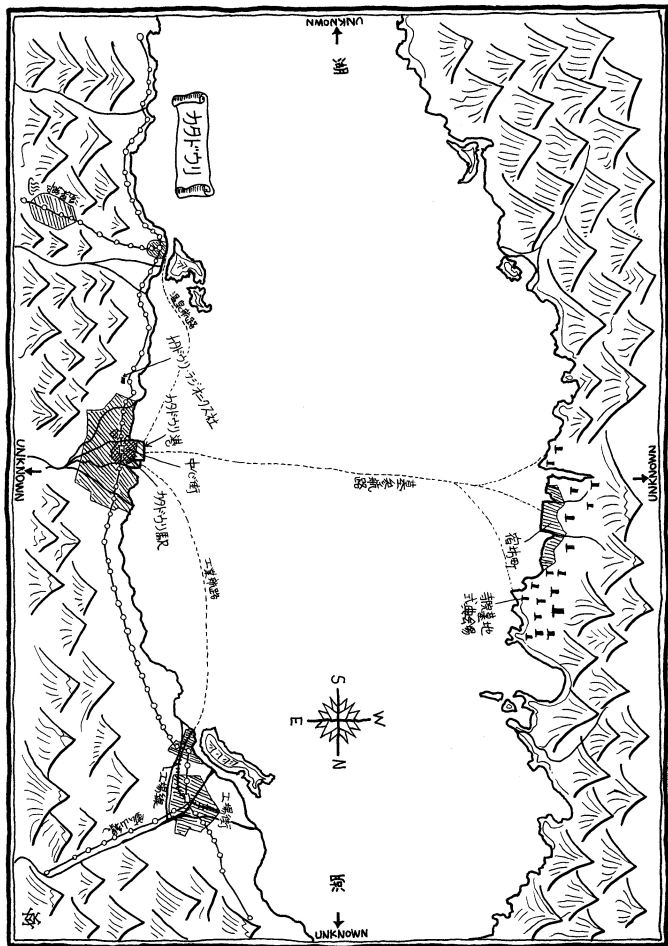
マリールは何となく自分をさけているようだし、アカツキも面と向かつてではないもの、かげで自分のことを「デブ」とか「ハゲ」とかいつていることはホノワール氏はとうの昔に気づいていました。最近ではマリールともろくに口をきいていません。

ホノワール氏も、お風呂に入った時に下を向いて、

『おなかがいぶん出てきたな』

と思ったり、鏡を見ては、

『うーん、ぼうしでもかおうかな』



と思つたりすることはありました。

しかし、家族がなぜそこまで自分をきらうのかまではよくわかりませんでした。

『まあいいや。ぼくのいいところは怒らないことだ』

ふつうのおとうさんなら、その態度はなんだ、とか、ひとりで大きくなったような顔をするな、とか、怒鳴つているところですが、ホノワール氏はそういうことはしませんでしたし、怒るといふこともありませんでした。第一、争いというものが大きらいだったので。

その日は夏の暑い日でした。

いいえ、暑さをとおりこして、外にいとこげてしまいそうな日でした。

こここのところカタドウリの天気はめちやくちやで、季節の変わり目のおだやかな日というのは、まったくなくなっていました。とても暑いか、とても寒いかのどちらかになってしまつていたので。大きな地震なども、今まで地震などなかった場所でおきるようになっていました。その日も、ホノワール氏がビールを飲み終わると、とたんに、するすると冷たい風がふいてきて、ベンチにおおいかぶさるようにしげついている大きな櫨の樹が、ごごつと鳴りました。大つづの雨が降りだし、かちつかちつと小さなひょううまで降つてきました。

『こりやあ、いかん』

ホノワール氏はあわてて立ち上がると、あたりをみまわします。

すると、公園の外側の細い道にそつて小さなお店らしき家があるのに気づきました。よしず

のすだれにかくれて黄色い光がもれています。

軒先にぶら下げた色とりどりの盆ちようちんをあわててしまいこむ家を何軒かとおりすぎ、ホノワール氏は、今や激しい雨とひょうでかすんで見えるその店らしき家の軒にかけこみました。

『やあ。駄菓子屋か』

よしずのむこうで裸電球の光に照らされていたのは、所せましとならべられた、金や銀や青色にちかちか光る紙につつまれた小さなあめや、花火、ふうせん、こま、くじびきの景品、スターのブロマイドや、ラムネやメノコ、組み立て式のオモチャでした。

「すいません。軒先かしてください」

奥から出てきたのは背が丸まった小さなおばあさんで、おだんごに結った白髪の下顔は、まるで白だいふくに細い筆で目鼻を描いたみたいにもこにこしているのです。

「そんなところおらんと入りなさい」

「ありがとうございます」

ホノワール氏はガラスの引き戸のついた冷蔵庫をのぞきこんで、ラムネを一本取り出しました。

「これください」

「気いつかわんでいいのに」

「飲みたいんです」

そうして、ラムネを飲んでみると、こんな駄菓子屋で遊んでいた子供のころのことがどんどん思い出されてきて、わけもなく泣きそうになるのです。

「あんたは、よその人じゃね」

「会社の帰りにあの公園で休んでいくんです。家の近くの公園で同じことやってたら、かつこわるいからやめてくれって、女房に怒られましたね」

「大変だねえ。おとうさんやってるのも、おつとめ人やってるのも」

ホノワール氏が小さなタオルで顔の汗と涙と雨をぬぐっていると、おばあさんが傘をさし出していました。

「だいぶ小降りになったけど、今晚はやまないよ。持ってきな」

「ありがとうございます」

ホノワール氏はおばあさんから傘をかりて、いつもどおり、一駅分歩いてわが家に帰りました。

そしてその夜は、おばあさんのいったとおりになったのでした。

白橋 升

夏がはじまりおわる
ころ

ウミはその名前と裏腹に海に出たことなど一度もなかった。日がな一日、ただ海を眺めているだけ。そんな青年の前に、見ず知らずの、ひとりの子供が現れる……ちよつと不思議なひと夏のお話。

白橋 升

夜の石は天に昇り
空ゆく星に会えた

あなたのようなぼく、ぼくのようなあなた。ぼくとあなたでこの宇宙ができているのだとすれば、ぼくとあなた。それがすべて。旅している人に。旅が好きな人に。これから旅をしようとしている人に。

白橋 升

大きな櫛の樹の下に

均衡世界シリーズに迷いこんでしまう。はたしてそこは……

カタドウリという国に住む、ホノワール・オモタ氏はちよつと疲れたサラリーマン。ある日偶然見つけた占いの本に導かれるようにして、カタドウリとは、似て非なる国

カタ中央大学 ユウキ・シンダイ大教授

ほんとうのこと、または、

でたらめの書

均衡世界シリーズ

「大きな樫の樹の下に」に登場した占いの本を忠実に再現。ホノワール・オモタ氏が手にした不思議な本が、あなたの手にも。シンダイ大教授の懇切丁寧な説明付きです。物語の続きはぜひあなたの手で！

白橋 升

ミネリの銘板

均衡世界シリーズ

「大きな樫の樹の下に」続編登場！舞台はオモタ氏がカタドウリへと帰った一〇年後のカタ。古書店を手伝うミオは偶然出会った年上の女に、面倒にまきこまれそうなどころを救われる。女は実は「魔女」で……

以下続刊

